

煤煙

映画文学人生論

原作：森田草平（1909）「朝日新聞」

参考：『漱石先生と私』（1941-43）東西出版社

参考；夏目漱石『それから』（1909）「朝日新聞」

監督：森田芳光（1985）

出演：長井代助 松田優作 平岡三千代 藤谷美和子
門野 羽賀研二 平岡常次郎 小林薫

私、煤煙の立つのを見てると、真実に好い
気持なのです

夏目漱石『三四郎』が朝日新聞に連載されたのは明治四十一年九月から十二月、『それから』は明治四十二年六月から十月。その間のつなぎとして森田草平『煤煙』が連載された。

「煙が好う御座いますね。私、煤煙の立つのを見てると、真実に好い気持なのです。」

「貴方の心の中の動揺を象徴的（シンボリカル）に表してるやうだから？」

主人公の要吉と朋子が砲兵工廠の高い煙突から吐き出される煙を眺めながら話す場面がある。こんなハイカラで、歯の浮くような会話がこの小説の文学的内容を象徴しているようだ。

『煤煙』の朝日新聞への連載を推薦したのは漱石だが、漱石はどう評しているだろうか。

四十二年二月七日付草平宛手紙では、「拝啓。

『煤煙』世間にて概して評判よき由結構に候。一から六まではうまい」と、一応褒めているが、ハイカラで歯が浮きそうな会話には批判的で、「警句が生けると同時に小説滅びる事あるべし。切に注意ありたし」と忠告している。しかし、要吉と朋子が心中未遂事件を起こす場面までの描写は忠告を素直に受け入れているようにはみえない。

漱石の『それから』には書生の門野が新聞連載



煤煙

映画文学人生論

中の『煤煙』を話題にする場面がある。

「どうも『煤煙』は大変な事になりましたな」と
(門野は) 大きな声で云った。

「君読んでるんですか」

「ええ、毎朝読んでいます」

「面白いですか」

「面白い様ですな、どうも」

「どんな所が」

「どんな所がって、そう改まって聞かれちゃ困りますが、何じやありませんか、一体に、こう、現代的の不安が出ている様じやありませんか」

代助は高等遊民だが、日本の文学者が、好んで不安と云う側からの社会を描き出すのを、舶来の唐物、つまり、外国かぶれのように見なした。金に不自由のない外国文学の主人公が退廃的なデカダンスの行動にはしるのはわかるが、要吉のような貧しい境遇の日本人が新しい女の朋子とそんな行動をとるのが理解できない。

彼らを動かす内面の力は何だろうか。おそらく不安からじやあるまい。むしろそのような行動を断行するのを躊躇する自分のほうにこそ不安の分子があつてしかるべきだと代助は考えた。そういう代助の不安も普通の読者にはわかりにくい。

汽車を逐て煙這行枯野哉 漱石